２０２１年１１月２８日　説教『主の来臨の希望』　　高橋克樹牧師
聖書　イザヤ５１章４～１１節、マルコ福音書１３章２１～３７節

　現代社会で「待つ」ということは時間の無駄だと考えられているために、ほとんど重んじられていません。また、「待つ」という姿勢は消極的なことだと受け止められています。そのため、「ジクジクしながら待っていないで、とにかく前に進みなさい」などと言われたりして、『待つ』ことに対しては大抵は否定的な反応が返ってきます。しかし、５１章の著者である第二イザヤは、バビロン捕囚という絶望の中にあっても、神による救済の約束を信じて、とにかく待つようにと告げています。詩編１３０篇５～７節に『わたしは主に望みをおき、わたしの魂は望みをおき、御言葉を待ち望みます。わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして、見張りが朝を待つにもまして。イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに、豊かな贖いも主のもとに』という有名な聖句があります。「わたしの魂は主を待ち望む」。これは聖書全体を通して鳴り響いているテーマなのです。

　しかし、待ち望むという信仰的な態度は、ただ漫然と時間が経過することを待っていることではなりません。神の御業が困難と思える状況の中で、目には見えないけれども神が救済の御手を働かせるときが確実に始まっていることを信じて待つ信仰的な姿勢を神は求めているのです。それは神の約束があるからこそ、神の御業が静かに動き出していることを待ち望むことが可能となるからです。ですから、待ち望む人々の間で神の救いの約束が次第にかたちあるものとなっていくのです。また、待ち望むことは、受け身的な信仰の態度ではなく、積極的に待つ姿勢のことです。私たちは電車の到着時間が少し遅れただけでイライラしますが、神の御業は確実に始まっているのです。電車の到着が遅くて苛立っているときに「到着が遅れます」などと言われると、次の予定が気になって余計にイライラするのが現代人ですが、それは自分が何もできないからそのように感じてしまうのです。ところが、神の御業が成就することを積極的に待つ人は、すでに種は蒔かれていて、あとは期待をもって機が熟するときを待てばいいということを知っています。さらに積極的に待つことは、待っている間の時を大切な時間として過ごすことになります。待つことを受け身的なこととして理解してしまうと、待っている時間のすべてが無駄なこととして、粗末に扱うことになってしまいがちです。ですから、神の御業が為されるのだから、その結果に対して開かれた態度を持ちつつ、そのことを待ち望んでいるならば、神の御業が見えてくるのです。待ち望みつつ結果を受け止めない限り、どのような結果も不満足なものと受け止めてしまうことになるでしょう。というのも、私たちはいつも自分の願っている結果だけを求めがちなので、開かれた態度で

待ち望まないかぎり、神の意志よりも自分の願いを上位に置く信仰者になってしまうからです。それは自己偶像化です。

さて、このバビロン捕囚の期間、イスラエルの捕囚の民のすべてが主を待ち望んでいたわけではありません。バビロンでの捕囚の生活の中でイスラエルの民も次第に生活の基盤を異教社会のなかでかたちづくっていました。逆にエルサレムに帰還して神殿を再建し、神の民として生きることの方が困難だと諦めてしまった捕囚民の第二世代、第三世代の人たちが大勢を占めていました。だから、彼らは主が力を発揮して、イスラエルの民をバビロンの地から解放してくださることに望みをおき、主がイスラエルを再興させる日を「待つ」ことは「時間の無駄」であると考えるようになってきました。「主を待ち望む」こと自体がばからしい信仰的な態度であるかのように受け止められていました。神はかつてイスラエルの民をエジプトから解放しましたが、バビロン捕囚からの解放を第二の出エジプトとみなして、希望をもって待ち望むことを促したのが第二イザヤでした（４３章１６～２０節参照）。彼は捕囚からの解放が神の贖いの業として行われることを説きました。かつてのイスラエルの民は、エジプトからの脱出と解放、カナンの地への定住という経験を通して、神の選びを知り、神が苦難の時にも共にいることを知りました。それが選民イスラエルという自意識を生みだしたのです。そして、そのような神が天地万物を創造したと考え、その創造のエネルギーによって再びバビロンの地での捕囚状態から解放へと導くことを察知したのです。捕囚の時代に創世記１章の創造物語が誕生したのは、捕囚からの解放の御業が既存の状態からの解放ではなく、新しい神の創造の御業だという認識をもっていたから生まれた物語なのです。

第二イザヤは５１章４節で『わたしに聞け』（１節、７節参照）と言っているように、神の救いの御業の到来について傾聴することを、まず求めます。さらに注目すべきは、１～８節までにツェデク（義）という言葉が５回も出てくることです。１節の『正しさ』、５節の『正義』、６節の『恵みの業』、７節の『正しさ』、８節の『恵みの業』らの訳語はすべて原語がツェデクです。このツェデクは、神との正しい関係を表わすとともに、再創造された民がこの世で神の新しい御業に参与して、神と共に正義と平和を実現するために働く担い手になることを示す言葉です。７～８節では捕囚からの解放後の状況が念頭におかれていて、エルサレムへの帰還に否定的な人々に対して『恐れるな』との励ましの言葉が述べられます。神の救済の意志としての神の「正しさ」を知り、神の教え（律法）に心をおくことを求めています。１０節は出エジプトの出来事が念頭におかれています。捕囚からの解放は神が主導して行う第二の出エジプトだというのです。

第二イザヤは捕囚からの解放が目前に迫りながら、エルサレムに帰還するこ

とを捕囚民が躊躇する困難な時代に預言活動をしました。彼は神が創造と贖いの業をなされることを待ち望むことを預言として語りましたが、それは捕囚民がその苦難の中で解放されることを待ち望むことで知ることになるイスラエルの民に対する神の真実さでもあったのです。どん底に突き落とされ、惨めで無力感に押しつぶされそうな中で知った神の救いの約束だったのです。そこで捕囚民はバビロンからの解放が神の愛の発露による贖いの意志であることを知りました。神が自分たちを贖ってくれるのは、捕囚民が神のものだからです。

贖う（ガーアル）という語は、親族の中で誰かが召されると、借金のために、その人に割り当てられていた嗣業の土地や家族が奴隷として人手に渡らないように、親族の中で最も近い血縁者がそれを買い取る権利と義務を持っているというものです。その権利を買い取る人のことを贖い主（ゴーエル）と言いましたが、それが捕囚の民にとってはヤハウェだという認識を持ったのです。それは解放の御業は神の創造の力によるものであるという以外に説明のつかないことであり、それはイスラエルの民に対する贖いの御業であるということでしか説明がつかない解放の御業だと言う認識に至ったのです。

捕囚民には自らの力で解放を勝ち取る力はない。けれども、無から有を造りだす神ならばそれが実現できる。だから、その神の御業が行使されるときを待ち望むのです。しかし、それは冒頭でも言ったように、ただ漫然と待つということではなく、希望をもって待つという捕囚民の側で、神に対する根本的な信頼の態度が生まれたから、生じた信仰的な転換だったのです。絶望的な状況の中での、この捕囚民の意識転換は、新たな神の民の創造でもあったのです。バビロン捕囚から解放された民は、神の創造の力の証人として、人間の無力さの中にあっても人間を立ち上がらせて下さる神に信頼を寄せることを知ったのです。慰め主である神が自分たちの苦しみを分かち合ってくださることを通して、贖いの御業をなしてくださることを耐えて、待ち望む力が与えられたのです。アドヴェントの期間、神が私たちを救うために御子イエスをこの世に遣わして、根本的な救いへと導いてくださって、新たに生まれ変わらせてくださる降誕の恵みを感謝し、その神の贖いの業を待ち望む力を育んで下さることを覚えたいと思います。